

なかなか幼稚園になじまない子ども



権 平 俊 子

はじめに

幼稚園にいきたがらない、幼稚園で何もしないでじっとしている、幼稚園で勝手な行動をして、みんなと同じようなことをしないなどと、幼稚園になじめないということを心配して相談にみえる例に接します。

そうした事例を検討してみますと、子ども側に問題がある場合でも、幼稚園側で適切な扱いをすることによって、だんだんに解決されていく例が多いようです。反対に、入園当初にちよつと示す不適応な行動の扱いをあやまっただけで、子どもの問題はこじれるばかりになることもあります。こうした問題について少し考えてゆきたいと思います。

幼稚園になじめない子ども側からみた 問題点と園の扱い方

幼稚園になかなかなじめない子どもの場合、先ず、子ども側の問題に目を向けることが必要で、それに対する園での扱い方について考えてみたいと思います。

(1) 知能発達がおくれている子どもの場合

知能の発達がおくれているということを幼稚園児の場合、判断することはなかなか困難で、軽々しく判断することは避けるべきだと思います。他の園児の中で、描画、遊戯など、目立っておくれているより、一人で勝手な行動をしているようであれば、先ず知能の発達のおくれを疑ってみる必要があります。

集団では行動できなくても、家での様子を聞いて、家で絵を描いたり、遊戯をしているようであれば、集団になじめない子どもと考えることができます。（この問題については後述）知能の発達がおくれているようであれば、専門家に知能検査をしてもらう必要があります。もちろん、経験ある専門家であれば間違うことはないと思いますが、幼児の場合、知能検査の結果、出た知能指数だけを過信することは危険です。日常の行動や、生育史などを参考にして判断することが大切です。

知能の発達がかなりおくられている子どもは、勝手な行動をしていても、自分自身は他との釣合いなど気にならないので、喜んで通園している場合が多いようです。しかしおくれがひどくない場合には、園の先生も子どもが努力さえすれば、もうちょっとみんなと同じようについていけないかと思ひ圧力をかけたたり、親の方も、教え込めば、よいのだと思ひ、子どもの発達段階以上のことを無理矢理に教え込もうとしたりするので、子どもを不安定にする恐れがあります。

子どもの方も、自分と他を意識して、みんなより上手にできないことを認識したり、友だちに、「下手だなあ」といわれたことが気になって、劣等感を持ってしまい、積極的にしようとする意欲を失ってしまった事例もあります。

こうした場合、どのように扱ったらよいかというと、子どもの

知能の発達が、一年近くおくらっていたり、生まれが三月だったりしたら、該当年齢よりも一年下のクラスに入れた方が園でも扱いよいし、子どもの方に無理な圧力を加えることがなく、かえってよい影響を与えた事例を経験しました。こうした場合、母親が「家の子どもはそんなにひどくおくらてはいない」と考えたり、反対に、「もうこの子どもは駄目だ」とあきらめる結果になるので、扱い方に困難を生ずることがあります。母親によく子どもの状態を納得させることが大切です。園と両親だけだと感情的になり、問題がこじれる恐れがあるので、専門の相談所のカウンセラーの協力を得ることもよいことだと思います。

組編成をかえるまでもないほどのおくれの子どもの場合には、その子どものできることをみとめてやるようにし、当番など単純な仕事をさせたりするようにします。画一的な教育をしようと考えすぎると、保育者はいらいらするのも当然でしょう。

知能の発達のおくれが原因だけでなく、子どもには得手、不得手がありますので、流動性のある保育プランを立てることが大切です、それぞれの特徴を見きわめていくようにしている幼稚園では多少の難がある子どもでも、うまく適応しているような気がします。

試験をして、知能の優秀な子どもだけをとる幼稚園がありません。こうした観点で入園をきめる幼稚園に、特別な関係で、他の

園児より目立って発達のおくれた子どもを入園させた場合に、いろいろな困った問題が起こることが多いようです。園の教育方針について、とやかくいう立場ではありませんが、園の数が多いところでは、その子どもに合った幼稚園を選ぶことができるので、無理のない保育をすることが可能です。園の少ないところでは、いろいろな困難がでてきます。

知能の発達がおくれぎみの子どもの場合こそ、私どもの立場からいうと、小学校入学前に幼稚園教育を受けさせたいと思います。組織成などを考慮して、保育してゆくことが必要であり、園の協力を切望しております。両親も家の子どもはおくれているからと、あきらめないうで幼稚園の教育を受けさせるよう努力してゆきたいものです。

(2) 心理的な問題で集団になじめない子ども

知能の発達はおくれないのに、集団になじめない子どもがあります。園での行動は何もしないでじっとしている子ども、一人で勝手な行動をしている子ども、その勝手な行動は、静かに描画などしているのと、乱暴な行動をする場合があります。幼い子どもは初めての集団生活を経験して、多かれ、少なかれ不応を起すものではありませんが、それがひどく、他の子どもが適応する時期に入っても不応を示す子どもがあります。

前述の知能の発達がおくれた子どもとの分別もむずかしく、また、視力障害、聴力障害など身体障害が原因になっている場合がありますので、その点にも注意することを忘れてはなりません。

こうした子どもは、必ずといってよいほど、家庭での扱いに問題がありますので、家庭の協力が必要になります。家庭では全く問題がなく、集団に入れて、我が子が示す不応な行動にびつくりして、はずかしいと我が子が劣等感を感じたり、反対に、家では問題のない子どもなのだから、園の扱いが悪いに違いないと攻撃を向けてくる場合さえあります。お互いの疑問をとくために、早い時期にゆっくり話し合う機会をつくるのが大切です。

家庭の扱いや、家族関係などに深い問題があるような場合には、教師対子どもとの両親という関係では、教師が相談者としての能力がないというわけではありませんが、かえってうまくいかない恐れがありますので、専門の相談所の協力を求めた方が失敗が少ないように思います。入園から月日がたっても、不応の状態がひどいようであれば、自閉症や脳の器質的な障害を疑って専門の相談機関に紹介する必要があります。

a 園で何もしない引込み思案の子どもの園での扱い方

家に帰れば元気で動きながら、また十分に能力がありながら、園では何もしない子どもがあります。人に迷惑にならないために、大ぜいを扱っているとつい忘れがちですが、時折関心を示し

てやるのが大切です。無理矢理に集団に入れようとあせるのは禁物ですが、この子はみんなといっしょにすることは嫌いなのだという考えで子どもと接することは一番避けるべきです。子どもの方も日々変化しております。時折、無理のないように、静かにやさしく誘ってやりましょう。

当番なども初めからとばさないと、他の子どもと同じように、扱ってやりましょう。そして、もし子どもが応じない場合には、「今日はしたくないのね」とそっとしておきましょう。ちょっとしたきっかけで動きだすものです。話をするのを好まなくても、動作ならする子どもなら、動作だけでも、どんどんさせるようにします。その子どもの得意なことを認めていくように心掛けてゆきます。

専門の機関で心理療法の一方法である遊戯療法や母親のカウンセリングを行ない、園との協力によって、子どもの問題を解決していくこともできるので、そうした方法を考えることもよいと思います。

b 母親から離れない子どもの園での扱い方

入園当初に母親から離れることに不安を感じる子どもは多いものです。泣いても、騒いでも無理矢理に離すことも、一方法かもしれませんが、子どもが不安になって、こじれてしまう事例に接することもありますので、母親についても、自然に離すよ

うにした方が失敗しないと思います。母親がいてくれさえすれば、みんなと同じように行動する子どもと、母親がいても不適応を示す子どもがあります。不適応を示す子どもだと、母親の方がいらいらして、子どもに圧力を掛けるので、保育していく上で困ることがあります。

こうした時には、子どものいないところで、よく話し合って母親の協力を求めることが必要です。母親から無理矢理に離さないようにはしますが、この子どもは母親から離れないのだと考えて、いつまでもそのまま続けるのもよいことではありません。だんだんに「今日は廊下で待っていて下さるから」というように離す準備をしてゆくように心掛けてゆきます。

子どもには、いるからといって黙って逃げ帰ったり、隠れることはよくありません。初めは離れていたのに、しばらくたってから母親から離れなくなる子どもについても同様ですが、子どもを迎えにくる時間がおくれたり、子どもが家に帰った時に、鍵がかかっていたというような経験から、母親から離れることに不安を感じる例があるので、その点にも注意する必要があります。

c あばれ回ったり、乱暴な行動をする子どもの園での扱い方

あばれ回ったり、乱暴な行動をする子どもは、他の子どもに迷惑をかけたたり、子ども自身がけがをしないかと心配にもなり、一番扱いにくい子どもです。その乱暴な行動が、前後の見境なく、

コントロールできないようで、衝動的に乱暴するようであれば、脳の器質障害などを疑って、専門の機関で相談することが必要です。

乱暴な子どもは頭から叱りつけると、かえって攻撃的な行動はつもの一方になります。そうした行動をしなければいけないという気持の背景をよく理解して、問題解決をする必要があります。家庭での扱いや、家族関係に複雑な問題がある事例などについては、専門家の協力を得て、子どもに対して、遊戯療法やそれと併行して、母親に対してカウンセリングをするなどの方法をとることも問題を解決をする一方法だと思います。

あべれたり乱暴をしたり攻撃的な行動をする子どもは、多くの場合、おとなの注意をひこうとするための手段として、こうした行動をするのです。口喧しく注意ばかりしていると、かえってはげしくなるばかりです。危険でない限り、無関心な態度をとり、その反面、用事を頼んだり、何か得意なことを一人でさせたり、攻撃的な行動以外のところで認めてやるようにしましょう。

悪いことをする子どもだという印象を周囲の者が持つてしまつて、何かいたずらがしてあると、よく確かめもしないで「○○ちゃんいけませんよ」など声をかけることは何より禁物です。また他の子どもたちも悪いことをする子どもだというイメージを持つてしまつて、悪いことはみんなその子に押しつけていることがよ

くあり、そうされることによって、なおさら子どもの攻撃的行動をつのらせる結果になってしまいます。

その子どもの長所を認めてやるよう努力するのもよい方法でしょう。攻撃的な行動をする子どもは、一見何も感じないようですが、感受性の強い子どもが多いものです。強いおしおきをするよりは、やさしく声をかけたり、相手になってやることの方が効果的です。

私のところに相談にみえた四歳男児ですが、入園当初、はしゃぎ回り、ある日、公園にいつてお弁当を食べるといふことになつたら、嬉しくはしゃぎ回り、先生に注意されても、席につかずとびはねていたため、ひどく叱られて、教会の礼拝堂の奥に一人おいてこられました。次の日から幼稚園にいくことを嫌がり、母親が無理矢理に連れていくと、部屋に入りたがらないで、庭を走りまわり、先生がなだめても、叱つても勝手な行動をとり、母親が帰宅すると、後を追ってさっさと園外にとび出し、園側から責任がもてないからと、登園を断られる始末でした。

子どもに対しては遊戯療法、母親に対してはカウンセリングを行なうと同時に、この子どもをよく理解してくれる幼稚園に転園しました。その園では、母親から無理に離すことをしないで、根気よく園の生活になれさせるようにしました。母親がだんだんに遠くにいってもよくなり、しまいには少し離れた園長宅で待つて

いて、遂に離れることができ、園の生活にもなれて、運動会ではみんなと同じような行動をとることができ、問題は解決されました。この事例のように、幼稚園側の理解と適切な処理によって、子どもの問題を解決していくことができるわけです。

d 身体障害がある子どもの場合の園での扱い方

難聴児、視力障害児、口蓋裂児（口の中に異常がある）肢体不自由児など、身体障害がある子どもの場合、その程度が重いときにはすぐに気がつきませんが、軽い場合には、園の生活に不応を示し、その原因が身体障害にあることがあります。落着きないということを主訴として来所した、六歳女児は、耳の聞こえが悪いの気がつかなかつたため、紙芝居やお話の時、よく聞えないので、つまらないため、立ち上がって一人で勝手な行動をしていました。難聴であることがわかり、アデノイドをとるなどの治療で、聞こえが少し回復し、また耳の聞こえが悪い子どもだということを理解して保育したので、問題は解決しました。

手に軽い麻痺のある子どもは動作がのろかったり、折紙が上手に折れなかつたりします。足に軽い麻痺のある子どもは、スキップが上手にできなかつたり、もたもたして敏捷な行動がとれなかつたりします。そういう子どもに対しては、「早く、早く」とか、「みんなできるのにどうしてできないの」などということは禁物で、おそくても、下手であっても、子どものしょうという気持ち

を認めてやるようにしましょう。そして、勇気づけたり、何かできることを積極的にさせるようにしましょう。

口蓋裂児は口の中に先天的に障害のある子どもですが、最近都市においては、二歳前後に手術を終わっている子どもが多いので、言語障害も軽い子どもが多くなってきました。

他の言語障害児に対しても、保育場面では、「はっきり話をしなさい」とか、「もう一度、はっきりいってごらんなさい」と練習させることは禁物です。（但し、理解できないときは、いい加減の返事をするより、やさしく「先生ちょっと聞こえなかつたの、もう一度いって」と問いかえした方がよいようです）子どものできることを認めてやったり、用事を頼んだりして、他の面で自信をつけてやるようにしましょう。

あとがき

以上、幼稚園生活に適応しにくい子どもについて述べてみました。紙面の都合で具体的な例をあげて説明をすることが余りできませんでした。私もはこうした不適応を起こしやすい子どもこそ、幼稚園生活を送らせてやりたいと心より願っております。園の理解と、ご協力により、子どもの生涯の基礎をつくり、母親にも子どもに対する理解と自信をつけていくことができるのではないかと思います。

（日本総合愛育研究所）